

氏 名	中 田 真 司
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 5163 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学 位 論 文 名	Long-Term Cardiovascular Outcomes Following Ischemic Heart Disease in Patients with and without Peripheral Vascular Disease (末梢血管疾患を合併した虚血性心疾患患者の長期予後)
論文審査委員	主 査 教 授 末 廣 茂 文 副 査 教 授 上 田 真 喜 子 副 査 教 授 竹 内 一 秀

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】頸動脈狭窄症、閉塞性動脈硬化症、動脈硬化性腎動脈狭窄症などに代表される末梢血管疾患（PVD）は冠動脈疾患（CAD）と密接な関係があると報告されている。

【目的】CAD患者に対し体表超音波検査を施行しPVD合併頻度を検索し、無症候性及び症候性PVD患者の予後を検討した。

【対象と方法】2003年1月から2005年12月までの2年間に岸和田徳洲会病院で経皮的冠動脈形成術を施行した連続380例を対象とした。内訳はST上昇型心筋梗塞（STEMI）患者（200例）と狭心症患者（180例）であった。連続380例を対象として左右の頸動脈、鎖骨下動脈、腎動脈、腹部大動脈、腸骨動脈、大腿動脈の体表超音波検査を施行した。PVDは診断基準に基づき高度狭窄病変を有する症例とした。2006年9月までの外来経過観察中に心血管イベントの有無を経過観察した。

【結果】冠動脈疾患患者の24%にPVDを認めた。PVDを合併するCAD患者は、PVDを合併しないCAD患者と比較し有意に高齢者、糖尿病、喫煙（ $p < 0.05$ ）、冠動脈多枝病変（ $p < 0.001$ ）を多く認めた。心血管イベント（MACE）に対する多変量解析ではPVD、冠動脈多枝病変、STEMIが独立した危険因子であった（ $p < 0.05$ ）。対象患者をPVD合併の有無と、狭心症群、あるいはSTEMI群の4群に分類しMACEをKaplan-meier curveで検討するとSTEMIにPVDを合併した群が最も予後が悪かった（ $p < 0.05$ ）。PVD患者を症候性と無症候性に分類すると症候性患者が53%、43%が無症候性であった。症候性PVDと無症候性PVD患者の予後をLog rank testを用いMACEを検討すると両群の間に有意差が認められなかった（ $P < 0.82$ ）。

【結論】CAD患者に認められるPVDはMACEの予測因子の一つであり、その約半数が無症候性のPVDである。無症候性PVDでさえも症候性PVDと同じく予後不良である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

頸動脈狭窄症、閉塞性動脈硬化症、動脈硬化性腎動脈狭窄症などに代表される末梢血管疾患（PVD）は冠動脈疾患（CAD）と密接な関係があると報告されている。本研究の目的はCAD患者を対象に体表超音波検査を施行しPVD合併頻度を検索し、主に無症候性及び症候性PVD患者の予後を検討することである。

2003年1月からの2005年12月まで、初回の冠動脈疾患を主訴として来院した連続380例を対象とし、左右の頸動脈、鎖骨下動脈、腎動脈、腹部大動脈、腸骨動脈、大腿動脈の体表超音波検査を施行し全身動脈硬化を評価した。CADの内訳はST上昇型心筋梗塞（STEMI）患者（200例）と狭心症患者（180例）であった。PVDは診断基準に基づき高度狭窄病変を有する症例を対象とした。PVDを症候性と無症候性の病変に分類し2006年9月までの心

血管イベント（MACE）の有無をKaplan-Meier curveを用いて検討した。

その結果、CADの24%にPVDを認めた。PVDを合併するCAD患者は、PVDを合併しない患者と比較し有意に高齢者、糖尿病、喫煙（ $p < 0.05$ ）、冠動脈多枝病変（ $p < 0.001$ ）を多く認めた。MACEに関する多変量解析ではPVD、冠動脈多枝病変、STEMIが独立した危険因子であった（ $p < 0.05$ ）。対象患者をPVD合併の有無と、狭心症群、あるいはSTEMI群の4群に分類しMACEをKaplan-Meier curveで検討するとSTEMIにPVDを合併した群が最も予後が悪かった（ $p < 0.05$ ）。PVD患者を症候性と無症候性に分類すると症候性患者が53%、43%が無症候性であった。症候性PVDと無症候性PVD患者の予後をLog rank testを用い検討すると両群間に有意差が認められなかった（ $p < 0.82$ ）。

以上のことより、CAD患者においてPVDがMACEに対し密接な関係があることが示唆され、さらにPVD患者の約半数が無症候性のPVDであり、症候性PVDと同程度に予後不良である可能性が示唆された。本研究では、CAD患者におけるPVDの詳細が検討され、無症候性PVDが症候性PVDと同じく生命予後に関与している可能性をも示唆しており、著者は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認められた。